現代語における和語の連濁(1)

――複合形容詞の連濁――

戸　田　綾　子

1　調査の目的と方法

複合形容詞の連濁率は，先に行なった調査[①]により，『日葡辞書』（以下「日葡」と略すことにする），『和英語林集成』（以下「和英」と略す）において，他の連濁率より高いものであることがわかった。また，複合動詞の連濁率が他の品詞よりかなり低いということもわかったので，各品詞により，一語としての熟合度の違いが現われると考えられる。しかし，連濁にはその他にも，いくつかの条件が影響を与えている。その条件は，中世末期の「日葡」（1603-1604），明治期の「和英」第三版（1886）と，時代が下るにつれ，拘束力を弱めているように思われる。

そこで，今回は，連濁率の高さで顕著であった複合形容詞（前回の調査での「日葡」では全体の平均連濁率が約46%，複合形容詞が約73%，「和英」では，全体が51%，複合形容詞が66%であった）を対象に，現代語における連濁率と諸条件の関係，およびこれら三つの時代における連濁率の推移を調査していくことにした。現代語の調査にあたっては，中型辞書の一つである新潮社の『現代国語辞典』（以下「新潮」と略す）と大修館書店の『日本語逆引き辞典』（以下「逆引き」と略す）の二辞書を用いた[②]。「新潮」については複合語の認定が辞書中においてなされていること，一般的に使用されていることに，また「逆引き」は，一辞書による偏りをなくすためと，調査の簡便さにより，使用した。

調査は，連濁の可能性のある和語の複合形容詞（後項の頭音が清音であるもの）を対象とする。ここでいう和語には，和語と漢語，和語と外来語との混種語を含むことにする。また，①「～がましい（はれがましいなど）」「～がわしい（みだりがわしいなど）」などは，濁音を接合部に持つ派生型形容詞であるが，これらはほぼ規則的であり，連濁の結果か，はじめから濁音であったかという問題が残るため，対象から除外する。
②「～たらしい（貧乏たらしいなど）」「～ぽい（男っぽいなど）」なども，派生型形容

詞として，除外する。

③「複合動詞未然形＋しい（腹立たしい，苛立たしいなど）」は，複合動詞の派生であると考え，複合動詞の中で扱うこととする。

その他の接辞については，それぞれ接尾辞であるか，接頭辞であるかを項目とすることにする。

④また，「ものほしそう」など，全体として他の品詞に入ると思われるものは，各品詞において扱うこととし，今回は扱わない。

なお，「日葡」「和英」については，これまでの調査からこれらの検討を行なったためまた項目の見直しを行なったため，前回の「日葡」「和英」の調査と数値の違うところがある。また，語構成においては，複合形容詞一品詞に限ったため，「草木」「のぼりくだり」のような，構成要素が並列，対立するものはなく，「うれしはずかしい」「うれしかなしい」などは，用例として得られなかった。

カードは，カード型データベース『アシストカード』を用いた。調査項目は先学の論文などを参考にし，連濁に影響を与えそうな音声的，語構成上の種々の条件を考慮して以下の通りとした。

1　語形（辞書の見出しにならったもの）

例）あさぐろい，こげくさい

2　構成（前項，後項にわけたもの）

あさ＋くろい，こげ＋くさい

3　連濁か否か

a 連濁

b 非連濁

a － b 連濁非連濁両形を持つもの

4　語種別構成

a 和語＋和語

c 漢語＋和語

e 外来語＋和語

5　語構成

c 1 名詞＋形容詞

c 2　形容詞語幹＋形容詞

c 3 動詞連用形＋形容詞

c 4 擬音語＋形容詞

c j 畳語型形容詞

c s t 接頭辞を含むもの

c s b 接尾辞を含むもの

6　後項濁音など

a 後項第二拍が濁音

b－a 後項第二拍以下に濁音があるもの

b－c 後項第二拍が鼻音

b－d 後項第一拍第二拍が長音

b－t 後項第二拍が促音

その組み合わせ

7　前項末尾拍の子音

8　前項末尾拍の母音

9　後項頭子音

10　後項頭母音

11　拍数（２＋３，３＋４など）

12①前項濁音の位置

直前を１

その前を２と接合部から数えていく

②同音連続

イハ＋ハニ　連濁該当拍が前項末尾と同音連続になる（「した＋たるい」など）

イロ＋ハハ　連濁該当拍が後項第二拍と同音連続になる（形容詞にはないが「なに＋こころ」など）

イバ＋ハニ　連濁該当拍が連濁することによって前項末尾と同音連続になる

イロ＋ハバ　連濁該当拍が連濁することによって後項第二拍と同音連続になる

イイ＋ハニ　前項末尾に同音連続がある（「みみ＋とおい」「きき＋つらい」など）

イイロ＋ハニ　前項の途中に同音連続があるなど（「こころ＋つよい」など）

③前項末尾音の省略（「バター＋くさい」→「バタくさい」など）

13　以前の辞書との一致

n「日葡」　w「和英」第三版,

＜カード例＞

1　あさぐろい

2　あさ＋くろい

3　a（連濁する）

4　a（和語＋和語）

5　c－2（形容詞語幹＋形容詞）

6　b（後項の音声特徴は特にない）

7　s（前項末尾子音）

8　a（前項末尾母音）

9　k（後項頭子音）

10　u（後項頭母音）

11　2＋3（拍数）

12　無マーク（前項の音声特徴と同音連続）

13　無マーク（「日葡」「和英」にはない）

前回の調査との違いは，6の後項第一拍第二拍が長音であるという条件を一つ設けたこと，12の同音連続の分類項目を増やしたこと，13の以前の辞書との一致によって，比較がしやすいようになったこと，また残存しているものがどのくらいか，それらに特徴的な点があるかということがわかりやすくなったこととである。

2　調査の結果と考察

2—1　一次連濁率

これらのデータを算出し，各表にあらわした。その算出は以下の数式による。

$$連濁率=\frac{連濁数}{全用例数-両形数}\times 100$$

ここで得られた連濁率は一次的なデータなので，これを「一次連濁率」と呼ぶことにする。用例数があまり多くないので，断定的なことはいえないが，多少の傾向を見ることのできるところもある。

①表1より全体の連濁率は，時代が下るにつれ約74%，66%，62%と順に低くなっている。一方，「日葡」から三つの時代を通じて残っているものの連濁率は約88～89%とかなり高い連濁率を維持している。また「和英」以降に残ったものも，現代語の中では約72%と高い連濁率となっている。つまり，残存している形容詞は，連濁率が高いということになる。ちなみに，残存率は，「日葡」から「和英」で15.85%，「日葡」から現代語で10.99%，「和英」から現代語で35.53%である。他品詞よりもこの残存率が高ければ，形容詞の連濁率の高さの一要因と言えるかもしれない。

表1　一次連濁率—全体・残存

		日葡辞	和英語	現代語
日葡辞書	用例数	64	26	30
	両形数	2	0	1
	連濁数	46	23	26
	連濁率	74.19	88.46	89.66
和英語林集成	用例数		164	97
	両形数		2	3
	連濁数		107	68
	連濁率		66.05	72.34
現代の和語	用例数			273
	両形数			5
	連濁数			166
	連濁率			61.94

表2　一次連濁率—語種別構成

		日葡辞	和英語	現代語
和語＋和語	用例数	63	160	237
	両形	2	2	5
	連濁数	45	104	145
	連濁率	73.77	65.82	62.5
漢語＋和語	用例数	1	4	35
	両形	0	0	0
	連濁数	1	3	21
	連濁率	100	75	60
外来語＋和語	用例数	0	0	1
	両形	0	0	0
	連濁数	0	0	0
	連濁率	0	0	0
合計	用例数	64	164	273
	両形	2	2	5
	連濁数	46	107	166
	連濁率	74.19	66.05	61.94

表3　一次連濁率—語構成

	日葡辞	和英語	現代語
c 1 名詞＋形容詞	41	74	144
	2	2	4
	27	50	87
	69.23	69.44	62.14
c 2 形容詞語幹＋形容詞	6	7	23
	0	0	1
	6	1	11
	100	14.29	50
c 3 動詞連用形＋形容詞	8	22	39
	0	0	0
	7	20	33
	87.5	90.91	84.62
c 4 音象徴語＋形容詞	1	0	6
	0	1	0
	1	0	3
	100	0	50
c s t 接頭辞を含む	8	35	41
	0	0	0
	6	20	21
	75	57.14	51.22
c s b 接尾辞を含む	2	14	33
	0	0	0
	2	9	16
	100	64.29	48.48
c j 畳語語幹形容詞	6	26	24
	0	0	0
	5	15	16
	83.33	57.69	66.67

②表2の語種別構成では，後項が和語以外のものは見られないこと，用例数自体があまり多くないことから，和語＋和語の形のものがそのほとんどを占めている。漢語＋和語

のものには「縁遠い」「辛抱強い」などがある。

③表3からは，名詞＋形容詞というかたちのものが多く，それは当然ながら平均的な連濁率を示していることがわかる。また，動詞連用形＋形容詞のものに意外に連濁するものが多いことがわかる。ただし，これらの中には「えがたい」「はなしづらい」などの連濁することの多い接尾辞的なものが多く，名詞＋形容詞のものには，「ふんべつくさい」「けちくさい」などの連濁することの少ない接尾辞的なものが多いということも考慮する必要がある。

表4　一次連濁率後項濁音など

		日葡辞	和英語	現代語
後項第二拍が濁音	用例数	4	18	22
	両形	0	0	0
	連濁数	0	0	0
	連濁率	0	0	0
第三拍より後に濁音	用例数	2	3	3
	両形	0	0	0
	連濁数	0	0	0
	連濁率	0	0	0
第二拍が鼻音	用例数	1	9	14
	両形	0	0	0
	連濁数	0	6	7
	連濁数	0	66.67	50
第二，第三拍が長音	用例数	3	8	8
	両形	0	0	0
	連濁数	3	8	7
	連濁率	100	100	87.5
第二拍が撥音	用例数	0	0	1
	両形	0	0	0
	連濁数	0	0	1
	連濁率	0	0	100
その他	用例数	54	126	225
	両形	2	2	5
	連濁数	42	93	151
	連濁率	80.77	75	68.64
合計	用例数	64	164	273
	両形	2	2	5
	連濁数	45	107	166
	連濁率	72.58	66.05	61.94

また畳語型形容詞（「すがすがしい」「けばけばしい」「はなばなしい」など）の連濁率が畳語型名詞と違って高くないことも問題となるが，これには，後項の第二拍およびその後に濁音がある場合，連濁を起こさないというライマンの法則（「えはがき」「ねふだ」などは連濁しないが，「和英」においては「Dambashigo（段梯子）」「Fumbatagaru（踏んばたがる）」などの例外が出現している。）が関係していることも考えられる。また，接尾辞については，動詞連用形＋形容詞のものだけが連濁を起こし，その他のものは連濁を起こしていないこともわかった。

④表4からはライマンの法則が守られていることがわかる。また，鼻音は用例数が少ないこともあり，時代によって大きく違うため形容詞においてはあまり問題にできない。ところが，今回たてた項目の一つである長音（「まわりどおい」「えんどおい」「まちどおしい」「みみどおい」「こうごうしい」「そうぞうしい」など）はかなりの高

さで関係して見える。しかし，形容詞の場合，用例数の少ないこともあって同一後項である可能性が高いので，類推による結果の高さとも考えられる。長音が連濁を誘引するかどうかは，他の品詞においても調査する必要があるのではないだろうか。

⑤前項末尾の子音，母音についての表は省略するが，撥音，長音に続くもの（「かんだかい」「しゅうねんぶかい」「けいさんだかい」「しんぼうづよい」「めんどうくさい」など）は12例中８例，９例中５例しかなく，連濁率も，約67%，56%と期待したほど高くなかった。これは，「日葡」「和英」においては，全体的に高かったものであり，意外な結果といえる。形容詞だけの問題なのか，現代語全体にいえることなのか，注目に値す

表５　一次連濁率—拍数・日葡辞書

	＋２	＋３	＋４	＋５	＋６	合計
１＋	1	18	3	0	0	22
	0	0	0	0	0	0
	1	16	3	0	0	20
	100	89	100	0	0	91
２＋	3	21	9	3	1	37
	0	2	0	0	0	2
	1	13	6	2	0	22
	33	68	67	67	0	63
３＋	0	2	2	0	0	4
	0	0	0	0	0	0
	0	2	2	0	0	4
	0	100	100	0	0	100
４＋	0	1	0	0	0	1
	0	0	0	0	0	0
	0	0	0	0	0	0
	0	0	0	0	0	0
合計	4	42	14	3	1	64
	0	2	0	0	0	2
	2	31	11	2	0	46
	50	78	79	67	0	74

一次連濁率—拍数・現代国語

	＋２	＋３	＋４	＋５	合計
１＋	0	45	12	4	61
	0	0	0	0	0
	0	42	11	3	56
	0	93	92	75	92
２＋	1	87	56	12	156
	0	5	0	0	5
	1	42	32	1	76
	100	51	57	8.3	50
３＋	0	29	4	0	33
	0	0	0	0	0
	0	20	1	0	21
	0	69	25	0	64
４＋	0	22	0	0	22
	0	0	0	0	0
	0	12	0	0	12
	0	55	0	0	55
５＋	0	1	0	0	1
	0	0	0	0	0
	0	1	0	0	1
	0	100	0	0	100
合計	1	184	72	16	273
	0	5	0	0	5
	1	117	44	4	166
	100	65	61	25	63

る。

また前項末尾の母音では「u」の用例数が少なく，現代語の「a」「o」に続く連濁率が低くなっているように感じられるが，他の品詞との比較をまたなければならない。

⑥連濁該当拍については表5のように子音「s」の連濁率が他の子音より低いこと（これは連濁現象全体の傾向と一致している），「k」の連濁率が低下しつつあることなどがわかる。

⑦表6の拍数の表より，前項が一拍のものは連濁率が高く，二拍のものは他より低くなっている。一拍のものには，接頭辞が多い（「かぐろい」「かぼそい」など）こともあり，

表6　一次連濁率―後項頭子音

		日葡辞	和英語	現代語
k	用例数	22	67	127
	両形	0	0	0
	連濁数	19	43	67
	連濁率	86.36	64.18	52.76
s	用例数	11	26	32
	両形	0	0	1
	連濁数	5	13	16
	連濁率	45.45	50	51.61
t	用例数	17	33	57
	両形	2	0	2
	連濁数	11	28	40
	連濁率	73.33	84.85	72.73
h	用例数	14	38	56
	両形	0	2	2
	連濁数	11	23	43
	連濁率	78.57	63.89	79.63
c	用例数	0	0	1
ちゃ	両形	0	0	0
	連濁数	0	0	0
	連濁率	0	0	0
合計	用例数	64	164	273
	両形	2	2	5
	連濁数	46	107	166
	連濁率	75.19	66.15	61.94

一次連濁率―拍数・和英語林集成

	＋2	＋3	＋4	＋5	合計
1＋	0	40	9	1	50
	0	0	0	0	0
	0	36	8	0	44
	0	90	89	0	88
2＋	0	47	47	8	102
	0	2	0	0	2
	0	30	24	1	55
	0	67	51	13	55
3＋	1	9	2	0	12
	0	0	0	0	0
	0	7	1	0	8
	0	78	50	0	67
合計	1	96	58	9	164
	0	2	0	0	2
	0	73	33	1	107
	0	78	57	11	66

表７　二次連濁率―全体・残存

		日葡辞	和英語	現代語
日葡辞書	用例数	58	24	28
	両形数	2	0	1
	連濁数	46	23	26
	連濁率	82.14	95.83	96.3
和英語林集成	用例数		143	84
	両形数		2	3
	連濁数		107	68
	連濁率		75.89	83.95
現代国語	用例数			248
	両形数			5
	連濁数			166
	連濁率			68.31

表８　二次連濁率―語構成

	日葡辞	和英語	現代語
c 1 名詞＋形容詞	37	66	131
	2	2	4
	27	50	96
	77.14	78.13	75.59
c 2 形容詞語幹＋形容詞	2	7	16
	0	0	1
	2	1	12
	100	14.29	80
c 3 動詞連用形＋形容詞	8	22	24
	0	0	0
	7	20	19
	87.5	90.91	79.17
c 4 音象徴語＋形容詞	1	0	4
	0	0	0
	1	0	2
	100	0	50
c s t 接頭辞を含む	6	27	32
	0	0	0
	6	20	21
	100	74.07	65.63
c s b 接尾辞を含む	2	14	33
	0	0	0
	2	9	16
	100	64.29	48.48
c j 畳語語幹形容詞	6	20	17
	0	0	0
	5	15	16
	83.33	75	94.12

決まった型のものが多いため，連濁率が高くなっているのではないかと思われる。

⑧前項濁音については，用例が少ないこともあり，連濁しにくいとはいいきれない。現代語で，直前が20例中，両形あるものが２例，連濁するものが４例で，連濁率が22％であった。なお，この中には後項第二音節が濁音になる畳語型形容詞が13例含まれており，これらを除くと連濁率はぐっと高くなる。

⑨同音連続についてはその用例数の少なさから，判断はできなかった。

２―２　二次連濁率

２―１で得られたものの中から，規則的なライマンの法則にあたるもの，後項第二拍以降に濁音があるものを除去して，さらに連濁率を求める。これを二次的なものであるという意味で二次連濁率と呼ぶ。傾向としては以下の通りである。

⑩表７の全体の連濁率は，非連濁のみを除去したので当然高くなるはずで，それぞれ７

～９％ずつ高くなっているが，現代語では69％と「日葡」の82％ほどの高さにはならない。ところが「日葡」から続いて残存していると思われる用例の連濁率は，「和英」，現代語ともに約96％であり，ほとんど連濁するといっていいくらい高い。もちろん，これらの数値は，用例数の少なさから信用度はあまり高くないが，偶然とはいいきれないであろう。

⑪拍数についても，前項が一拍のものはさらに連濁率が95％，94％，96％と高くなっている。（表は省略する。）

⑫語構成については表８より，動詞連用形＋形容詞が連濁しやすいことがわかった。それに関連してか，「ｉ」「ｅ」の母音の後の連濁率が現代語では高くなっている。畳語については，一次連濁率のところでの予想通り，ライマンの法則にあたるものを除いた結果はかなりの高さの連濁率となり，現代語において連濁しないものは，音象徴語語幹と考えられる「つやつやしい」一例であった。

⑬形容詞においてだけ言えることであるかもしれないが，後項頭子音「ｋ」の連濁率が低くなりつつあることがわかる。また，「日葡」「和英」全体の調査では「ｋ」より低かった「ｓ」が低くなりつつあるとはいえ，平均より高い連濁率を示したこと（⑥参照，一次連濁率では「ｓ」の方が低かった。）などがわかった。

⑭後項頭母音についても，一次連濁率と同様に辞書ごとの違いも見られ，傾向とさえいえるようなものがないということがわかった。

２―３　三次連濁率

二次連濁率から，さらに接尾辞を含むものおよび畳語型形容詞を除いて算出したものが三次連濁率である。用例数がさらに少なくなることもあるので，ここでは顕著なものについてのみ述べることにする。

まず接尾辞を含むものには，連濁するものも，連濁しないものもあるが，「和英」，現代語においては，連濁率が低く，そのため，三次連濁率を下げる働きをしている。全体的には，二次連濁率と大きな違いはないものと考えら

表９　三次連濁率―全体・残存

		日葡辞	和英語	現代語
日葡辞書	用例数	50	14	18
	両形数	2	0	1
	連濁数	38	13	16
	連濁率	79.17	92.86	94.12
和英語林集成	用例数		81	56
	両形数		2	3
	連濁数		62	45
	連濁率		78.48	84.91
現代国語	用例数			154
	両形数			5
	連濁数			113
	連濁率			75.84

れるし，用例数がいっそう減少することもあって，断定的なことは言えないが，「日葡」に対して，後のものは接尾辞を除くことにより，さらに連濁率を上げることがわかった。全体の結果は表９の通りである。

⑮全体的に連濁率が上がり，その時々でも75％以上の確率で連濁することがわかった。また，前回行った「日葡」「和英」全体の比較では，連濁率そのものは時代を下るにつれて上がっているのに，非連濁規則を除くと逆に下がってしまう現象が見られた（規則の崩壊と，類推率の増加が原因と考えている）が，形容詞に関しては，まるでそのような現象が見られない。

表10　後項別分類

後項	現代	和英	日葡
くさい	41	12	3
	0	0	0
	1	4	1
	2.4	33	33
ふかい	23	8	3
	2	2	0
	21	5	3
	100	83	100
かたい	18	7	4
	0	0	0
	18	7	4
	100	100	100
たかい	16	6	3
	2	0	0
	10	6	2
	71	100	67
くるしい	13	7	3
	7	4	3
	0	0	0
	54	57	100
つよい	8	6	2
	0	0	0
	8	6	2
	100	100	100

後項	現代	和英	日葡
きたない	7	4	0
	0	0	0
	6	3	0
	86	75	0
くらい	6	5	1
	0	0	0
	6	5	1
	100	100	100
くろい	6	4	1
	0	0	0
	6	4	1
	100	100	100
つらい	6	3	0
	0	0	0
	6	3	0
	100	100	0
さむい	6	0	0
	0	0	0
	2	0	0
	33	0	0
とおい	5	7	3
	0	0	0
	4	7	3
	80	100	100

後項	現代	和英	日葡
はやい	5	6	4
	0	0	0
	5	6	4
	100	100	100
からい	5	1	0
	0	0	0
	3	0	0
	60	0	0
たるい	5	1	0
	0	0	0
	3	0	0
	60	0	0
はずかしい	4	4	0
	0	0	0
	0	0	0
	0	0	0
かるい	4	2	1
	0	0	0
	4	2	1
	100	100	100

2—4　後項による調査

さらに，形容詞の場合，用例の少ないこともあってか，後項の種類が少ないために，類推による連濁の類型化があるのではないかと考えられるので，後項による調査も行った。結果は表10（現代語で4例以上あるものに限った）の通りである。

これで見てもわかるように形容詞においては，後項になるもの自体が少なく，かなり規則的に行われているものがある。一番多かった「くさい」において，唯一連濁するのは「なまぐさい」であり，接辞的であろうがなかろうが連濁しにくい傾向がある。また「かたい」は，「口堅い」「義理堅い」などのものも含め，ほとんどが連濁を起こしている。

つまり，後項は

1ほとんど連濁するもの　「ふかい」「つよい」「くらい」など

2ほとんど連濁しないもの　「はずかしい」「さびしい」など，ライマンの法則にかなうもの，「くさい」のような接尾辞的に固定化しつつあるもの，「きみわるい」のように長いもの

3どちらでもないもの　「たかい」「くるしい」「からい」などの3つに分けられる。

ただし，この3の中には，「さむい」のような，濁音との交替形「さぶい」を持っていたものもあるが，これは本来連濁しなかったものが「さぶい」という交替形を忘れつつある途上であるということを示しているのかもしれない。

3　結論

用例数が少なく，後項に同じ形容詞があるものが多いため，辞書の取り方によってずいぶん差が出ていることと思うが，今回の調査でわかったことは以下の通りである。

1）ライマンの法則は，現代語の複合形容詞においても有効であった。

2）古くから残っている語は，連濁するものが多い。

3）前項が一拍のものは連濁しやすい。

4）前項の末尾に，撥音，長音があるものは連濁しやすい。

5）他品詞よりやはり高い連濁率を持っていると推定される。（現代語の他品詞の調査が必要）

6）連濁率は，一次連濁率も二次連濁率も時代とともに低下の傾向にある。連濁全体と逆行するものである。

7）用例の偏りがあり，後項の形容詞により連濁率が左右されやすい。接尾辞による影響が大きく，それらを全て別に扱うべきかもしれない。

8）「い」型と「しい」型とに分けて見てみたが，量的に「い」型が圧倒的に多くなり，連濁との関連はわからなかった。

また，これを前回行なった「日葡」と「和英」の全体の調査結果と比較してみると以下のことがいえるであろう。

ア）複合形容詞の連濁率は全て，全体の連濁率に比べてかなり高くなっており，二次，三次連濁率においても同様である。これは複合形容詞の，一品詞としての熟合度ということになるであろう。

イ）連濁忌避のライマンの法則に関しては同じように忌避する。ただし，他の品詞では，例外がいくつか現われており，非連濁の規則も崩壊過程であると思われるが，形容詞にそれがないのは，複合形容詞の辞書記載が少ないことからの偶然かもしれないし，また形容詞の保守性に求めることができるのかもしれない。

ウ）接辞を含むものは，前回は忌避する傾向にあるものとしてあげられていたが，複合形容詞においては平均的な値を示している。これは，規則的に連濁を起こしやすい接辞があるためではないかと考えられる。

エ）拍数に関しては後項の多いものが，連濁しにくいという傾向があったのに対し，同じような傾向は見られず，ただ，前項が一拍のものは連濁しやすいという傾向を見せている。これは，前回の調査ではなかったことであるが，複合形容詞に現われる一拍の接頭辞に特殊な性格があるのかもしれない。

オ）連濁該当音節がサ・シャ・チャ行音であるものについては，前回はやや連濁しにくいものとしてあげたが，複合形容詞では，まるで逆になっており，かなり連濁率が高くなっている。これは，複合形容詞の場合，後項になるものに偏りが見られたためではないかと考えられる。

カ）前項末尾音が撥音，長音であるものは，用例数が少ないものの，やはり連濁しやすいと見られる。

これらのことからいえることは，音声的で顕著な条件は，複合形容詞の連濁においてもその他のものと同様に影響するが，その他の条件は，品詞によってそれぞれ違いを持っているのではないかということである。もちろん，それには複合形容詞全体の連濁率が，その他の平均に比べ，非常に高いこと，それに対して複合動詞の連濁率が非常に低いことから考えられる一語としての熟合度の違いということも含まれる。

また，複合形容詞の連濁率についての三つの時代による変化はあまり大きくなく，他のものより保守的であるとも考えられ（他品詞との残存率を比較する必要があるが），複合形容詞そのものが他の品詞より変化の少ないものという見方もできるのではないか。

なお，これらは，用例数が少ないこともあり，他品詞との比較を必要とすることも多い。また，いつもながら，接尾辞の問題，一語としての認定などの問題があり，断定的に取り扱うことのできないものも多いため，接尾辞を全部入れた場合，一部入れた場合，全く入れない場合など，段階的な捉え方が必要なのではないかと感じさせられた。なお今後は，複合動詞，複合名詞の連濁，およびそのアクセントとの関係についても調査・比較をしていくつもりである。

注

① 「和語の非連濁規則と連濁傾向――『日葡辞書』と『和英語林集成』から――」（『同志社国文学』第30号）

② 二辞書のそれぞれの用例数，連濁率は，および共通の用例，異なりの用例は次の表の通りである。共通にあげられているものは，一語としての認定がしやすい，熟合度の高いものと考えられ，連濁率も多少高くなっているが，それぞれが別に取り上げているものは連濁率が低くなっていることが注目される。

辞書名		新潮	共通	異なり
新潮社	用例数	227	179	48
現代国語	両形	5	4	1
	連濁数	139	112	27
	連濁率	62.61	64	57.45
大修館	用例数	225	179	46
逆引き	両形	4	4	0
	連濁数	139	112	27
	連濁率	62.9	64	58.7

参考文献

奥村三雄「連濁」（国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版）
小倉進平「ライマン氏の連濁論上・下」（『国学院雑誌』16巻7，8号）
金田一春彦「連濁の解」（『Sophia Linguistica』2）
中川芳雄「連濁・連清（仮称）の系譜」（『国語国文』35巻6号）
平野尊識「連濁の規則性と起源」（『文学研究（九大）』71）
桜井茂治「平安院政時代における和語の連濁について」（『国語国文』41巻6号）
遠藤邦基「連濁語のゆれ」（『国語国文』35巻5号）「非連濁の法則の消長とその意味――濁子音と鼻音の関係から――」（『国語国文』10巻3号）
森田武「日葡辞書に見える語音連結上の一傾向」（『国語学』108）